

看護教育における 「教育者－学生関係」の意味 －教育者の背景に焦点をあてて－

The Meaning of “Educator-Student Relationship”
in Nursing Education
－Focusing on the Educational Background of Educators－

中 嶋 尚 子

Naoko Nakajima

キーワード：教育者－学生関係、発達、規範、しつけ、看護教育

Key words : Educator-Student Relationship, Development, Model, Discipline, Nursing Education,

要旨

近年、看護教育者の間では「学生は未熟である」とする見解が一般的となっている。従来、その原因が学生にあるという視点で語られているが、ここでは日本の看護教育史を概観することにより、教育者側がもつ教育背景からこの問題を論じる。看護教育の近代化には、看護師＝優れた女性という性役割と、疑似家庭教育の場である寄宿舎制度が深く関わっており、家庭の中で親（教育者）が子ども（学生）に施すしつけによる教育が中心となっていた。

その後、看護職が優れた女性から専門職への転換期において、看護教育者は新たな教育の根拠を「発達」に求めた。「発達」という枠組みは、家庭におけるしつけと同様に、規範性をもって教育者－学生（＝大人－子ども）関係を説明することになり、その枠組みが教育者のまなざしのフィルターとなり、学生が生きる現実とはかけ離れた教育実践になりやすい。この従来の教育関係を見直すことにより、多様な関係の中で学習できる環境設定が可能になるであろう。

I. 問題の所在

近年、看護教員や実習施設の教育担当者（以下、教育者）の学生に対する評価にある傾向が見られる。「挨拶ができない」「身だしなみが整っていない」等の人間関係や組織に影響を与える態度、「自己中心的で、患者のことを

考えていない」「コミュニケーションがとれない」という学生の未熟さである。過去にも同様の声が全くなかったとは言えないが（中野、1989）、現在では自明となっている。

このような学生を理解する、あるいは効果的な教育方法の模索はすでに行われている。各自治体や看護協会、職場で行われる実習指

導者研修会では、現在の若者気質、若者が育った社会的状況が講義内容に含まれている(小村, 2008, 長野県看護協会, 2009, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター, 2009)。また、看護実践に不可欠な人間関係の中で悩む学生たちに答え、自己を振り返り、自分の欠点をわきまえ修正させるというカウンセリング等を用いた教育も行われている(原田, 2005)。青年期の特徴の理解やカウンセリングという教育方法は元々心理学を援用したものである。心理学は基本的に個を対象として働きかける学問であることから(小沢, 2008)、これらの教育方法の前提は、学生が発達段階に比して未熟であり、その原因が学生自身にあるとするものである。学生を取り巻く社会的状況を踏まえながら、なお学生自身に原因があり、その原因に対する教育方法を実践するという考え方の根底には、近代化に伴って発展してきた看護教育のあり方が背景のひとつにあると著者は考えている。この論文ではその背景を教育者側に焦点を当てて明らかにし、新たな教育の可能性を提案したい。

Ⅱ. 「教育者－学生＝大人－子ども関係」規範の成立背景

アン・ハドソン・ジョーンズは、「19世紀後半、F. ナイチンゲールが大酒飲みの娼婦という広く浸透した看護婦のイメージに闘いと挑んだ。」と記している(Anne Hudson Jones, 中島, 1997)。当時の看病人の非倫理的態度、看病人に対する社会的偏見がありながら教育によって上流階級の家風に派遣できるまでにするという点が看護婦としての教育であった。ナイチンゲールは、看護婦は優れた女性でなければならないとし、学校制度の中にホーム(寄宿舎)という家庭を取り入れて教育を行っており(河津, 2002)、日本もその制度を導入している(佐々木, 2005)。一方開業医における住み込みの看護婦見習いとして、礼儀作

法、家事や育児までも身につけることができる(平尾, 1999)システムもあり、疑似家庭の中で親(教育者)が子ども(学生)を優れた女性としてしつけるという職業教育のシステムが確立されたのである。

第二次世界大戦後も保健婦助産婦看護婦養成所指定規則(以下、指定規則)では寄宿舎制度は継続となっており、1968年(昭和43年)の指定規則改正に伴って男女が一緒に教育されることになっても依然として女性の入学生に限る看護学校が多く(佐々木, 2005)、実質的には疑似家庭教育に通じる寄宿舎制度は続いていた。

1980年代、これまでの世代と価値観の違う若者(当時「新人類」と称していた)の問題(杉浦, 1986)と重なり、人間形成における寄宿舎の見直し論が浮上している。主体的な手作りの生活創造、女性としての美的観念、さらには集団生活に適応し、将来の職場集団でのチームワークの基本を培うための「しつけ」の場として挙げられている(黒川, 1982)。また、教育者がもつほぼ均一な価値観とは違い「新人類」がもつ多様な価値観などの特性は、看護における対象との関わりにおいて摩擦や不調和が生じ、看護者としての職業上の問題を生起すると考えられ、1959年に発表されたH・ペプローの著書(H. E. Peplau/稲田ほか, 1973)を皮切りに対人的技能(interpersonal skill)が重要視されるようになった(杉浦, 1986)。対人的技能は具体的な形をとりにくいとしながらも、看護職の専門職化や、高度化した近代医療が医療従事者の対人的技能の貧困さを浮き彫りにしたことを背景に、個人の努力にゆだねられていた対人的技能を客観的に評価する動きがあった。実習における態度評価として、質問や意見開陳のような学習姿勢に対する項目と共に、身だしなみ、挨拶、出席時刻、協調性などの項目を挙げている(杉浦, 1986)。これらの項目は、専門職としての対人的技能というより従来寄宿舎で行われて

いた教育内容と同様で、対人的技能を実習態度に置き換えており、その背景にも教育者(大人) = 学生(子ども) 関係があると考えている。

Ⅲ. 「大人-子ども関係」規範教育からの転換

ナイチンゲールから受け継がれた優れた女性という考え方は、当時の社会が女性全体に求めるものであり、その社会の要請に応じるフォーマルなカリキュラムとして教育が行われていた。その優れた女性 (= 看護師) に育成するためにシステム化された疑似家庭教育は、教育者を「親」、学生を「子ども」と見なす。その後の対人的能力への転換は、優れた女性という教育規範からの脱却を意味する。教育者はその替わりとして「発達」にその根拠を求めた(近藤, 1986)。しかし「発達」も「大人」を頂点としたものであり(高橋, 広瀬, 2004)、学生を「子ども」と見なしていることに何ら変わりはない。特に1970年代以降、非行少年自身の規範意識や精神面に非行原因を見出す思考が一般化し、若者の責任を問う傾向があった。さらに1980年代以降になると、親子関係や親の養育態度にも非行の源があるとし、親の教育責任が強く問われるようになっており(広井, 2009)、看護教育においても少なからずそれらの影響があり、学生本人、もしくは親の責任を問う方向へと向かいやすくなっている。また「発達」は、学生を子どもに選別する役割を成し、学生の成長を客観的に捉えたかのような安堵感を与え(山名, 2009)、教育者-学生関係を大人-子ども関係と見なす土台へとつながっていく。

このように、教育者-学生関係を大人-子ども関係と見なす背景には、教育者が学生を未熟な子どもと見なし、大人である教育者が疑似家庭において、親の役割を模してしつけを行うことに歴史的な名残がある。著者の経験

では、臨地実習のオリエンテーションの際、学生に身だしなみ等をきちんとするよう指導することや、臨床実習指導者が態度の悪い学生を目にしても直接注意せず、後日担当教員に申し入れるケースがあることから見ても、学校を疑似家庭、担当教員を親、学生をその家庭の子どもと見なしていると言える部分もあるのではないだろうか。その状況は、学生を未熟だと思えば思うほど親(教育者)の責任が問われ、さらにしつけが厳格になり、それでもうまくいかないと再び学生を未熟と判断してしまうため、悪循環に陥ってしまう。そのため教育者-学生関係の中の循環だけで行われる狭い視野での教育となってしまう、悪循環の打開策を見出せず、両者がいくら頑張っても報われない状態になってしまう。

また「発達」という枠組みは、規範性をもって(高橋, 2004)教育者-学生 (= 大人-子ども) という関係を説明することになり、教育者は学生の状況を認識してはいるが、「発達」というフィルターを通して見ているために、実は学生が生きる現実とかけ離れた理解に留まっている可能性がある。その上「発達」という枠組みそのものが教育目標となり、教育者は単にその目標に沿えばよく、教育者間の議論は「どう指導するか」という技術中心になりやすい。また、大人-子ども関係は権力関係であり、その関係の中で子どもがノーと言えば問題のある子どもと見なされる可能性が高くなり(小沢, 2008)、ここでも学生が未熟であるという判断になりやすい。この状態で技術的な教育方法の議論を重ねてもこの枠組み自体を見直さない限り、その関係の中での悪循環は解消されにくい。

今教育者がやらなければならないことは、教育者自身が「発達」という枠組みを少し別のところに置くことによって、教育者-学生関係を大人-子ども関係と捉えていることを意識し、学生が生きる現実をありのままに捉え、疑似家庭教育から転換することである。

そうすれば学生がより多様な教育関係の中で学習できる可能性が生まれ、さらに豊かな教育が実践できると考える。

文献

- Anne Hudson Jones著, 中島憲子監訳 (1997): 歴史、芸術、文学におけるイメージ 看護婦はどう見られてきたか. 時空出版.
- 小沢牧子 (2008): 「心の時代」と教育. 青土社.
- 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター (2009/09/04): 平成21年度 教員養成課程 (看護教員養成コース) カリキュラム. <http://www.kuhs.ac.jp/center-homepage/kango.html#karikyuramu>
- 河津芳子 (2002): ナイチンゲールの近代看護婦養成システムの構造. 日本看護学教育学会誌, 12 (1), 1-10.
- 小村三千代, 橋本佳美, 水野照美ほか (2008): 平成20年度 臨床実習指導者研究会の実践報告. 佐久大学看護研究雑誌, 1 (1), 27-35.
- 近藤潤子 (1986): 情意領域の評価方法の現状と課題. 看護展望, 11 (11), 1051-1054.
- 黒川肇 (1982): 看護教育と寮制度 教育荒廃が叫ばれる中に. 看護教育, 23 (2), 91-96.
- 佐々木秀美 (2005): 歴史にみるわが国の看護教育 - その光と影 -. 青山社, 50-53.
- 杉浦静子 (1986): 看護学生の態度の育成 - その意義と実際 -. 看護展望, 11 (11), 6-10.
- 社団法人長野県看護協会 (2009): 平成21年度 教育計画 看護学生等指導者養成講習会 (委託事業). 33.
- 原田慶子 (2005): 学生が自己を理解していくプロセス. 日本看護学教育学会誌, 14 (3), 1-7.
- H. E. Peplau 著, 稲田八重子ほか訳 (1973): ペプロウ 人間関係の看護論. 医学書院.
- 平尾真智子 (1999): 資料に見る日本看護教育史. 看護の科学社.
- 広井多鶴子 (2009): 20歳成年制度の戦後史 - 若者の「精神的成熟」をめぐって -. 日本教育学会第68回大会発表要旨収録, 配付資料.
- 中野収 (1989): 時代の気分の中の若者. 看護展望, 14 (9), 17-20.
- 高橋勝, 広瀬俊雄編著 (2004): 教育関係の現在 「関係」から解読する人間形成. 川島書店.
- 山名淳 (2009): 成長・発達 - 子どもの成長はどのように語られてきたか. 田中智志, 今井康雄編, キーワード 現代の教育学 第7章, 88-99.